

雨上がりの川

森沢 明夫 作

(161)

オカヤイツミ 画

第六章 それぞれのモノローグ(17)

【紫音の話】

「見たくないものまで——」

「そう。見えちゃうの」

「そっかあ……」

「もっと霊的なことを言っと、道端を歩いているだけでいろんな霊が見えちゃうし、その霊に絡まれることもあるのよ。ひどいときは、夜、布団に入って電気を消したら、天井にパツクリと黒い裂け目ができて、そこから悪霊が出てきたの。で、しばらく天井のあたりに浮かんでいた悪霊が、わたしを見つけて、ぐいぐい憑依ひきついしようとしてきたこともある」

「え……、そういうときは、どうするんですか?」

「まあ、そんなに強い悪霊じゃなかったから、バリアを張るみたいにして跳ね返したけどね」

「バリア……」

「しかも、そういう悪い霊に逆恨みされることもあってさ。この霊の逆恨みっていうのは本当に怖いし、正直、命の危険を感じることもあるわけ」

「……………」



「あとね、この能力を使って、他人の心の深い部分とか、過去とか未来まで霊視したりすると、その夜はもう心身ともにくったりと疲れちゃって、ご飯すら食べられなくなることもあるのね。まあ、わたしくらい慣れちゃえば、けっこう大丈夫になるけど。でも、わたしも最初の頃は、二十四時間、布団から起き上がれなくなったりもしたんだよね」

「二十四時間、ずっと動けなくなっちゃうんですか?」

「うん。布団のなかで目が覚めても、心と体が消耗し切っちゃってて、まったく起き上がれないの。で、そのまま、また寝て。また目覚めても動けなくて、寝て——」

「その繰り返しで二十四時間」

「そっかあ……」

「春香は少しうつむいて、だんだんと表情を固くしはじめた。」

「よし、もう一押しだ。」

「この力はね、上手に使えば、得られるモノは大きいと思うよ。でも、その代わりに、失うモノもかなり大きいと思うの。春香ちゃん、それでもいい?」

「……………」